

## 人と意見

### 零細経営養鶏

## に目をそむけてはならない

岡山県養鶏農業協同組合  
組合長理事 山上茂吉

養鶏は、大規模企業的な経営が可能である反面に、副業的な、あるいは副業ともいえないような零細な規模でも経営できるところに特徴があり、それが長所であると同時に短所にもなっている。

数年来、養鶏への低利長期融資が盛んになり、大規模な企業的経営や主産地等集団養鶏地帯の造成等が目覚ましく発展している。しかし、まだそれらがわが国養鶏の主流をなすものとはいえず、依然として零細経営の養鶏が主流を占めているのが現実である。養鶏は鶏卵増産 10 ヶ年計画が政府によって実施された戦前は問わず、戦後は政治からも行政からも見放されたような存在で、生産物である鶏卵やブロイラーの消費増に支えられ、いわば民間の努力のみで今日の発展をみたのだといっても過言ではない。しかし、その間にあつて、生産物の価格が、零細養鶏の犠牲において、いわばそれが安全弁的な役割りを果たすことによって安定されて来たという事実、目をおおうことはできない。

鶏卵の生産が戦前に最も多かったのは昭和 12 年で、その生産量は 36 億 4 千万個であったが、昭和 37 年にはそれが 4 倍の 145 億 7 千万個に達している。また昭和 12 年における成雌 1 羽当りの産卵数 140 個に比して、昭和 37 年には 209 個になっているが、その生産増加を支えている需要は、この数年来特に著しく増大し、昭和 33 年の農家 1 戸当り年間消費量 380 個、都市 413 個、東京 504 個が毎年著増し、昭和 37 年には 541 個—625 個—673 個となっている。鶏卵価格 3 年周期説をなすものがあるが、この前安かったのは昭和 36 年で、今年はその安価周期に当たっている。しかし、年間平均の生産者価格をみると、昭和 36 年でもキロ 180 円で、決して引合わぬという価格ではない。また今年 1 月早々から予想以下の価格安がみ

られたが、間もなく持直した。それら卵価が一時的に低落した時見られるのは、食鳥市場への廃鶏出荷殺到である。そして持直した卵価の恩恵は、犠牲を多く払った人ほど少なくしかうけられない。

「アホウのトリ飼い」といわれる所為である。

零細経営の養鶏といえども、農家の余剰労力を活用し、いくばくかの現金収入を得ることによって農家経営に寄与しているものである。それらの人々は何らの庇護もなく、当然政治や行政が行なうべき生産物価格安定を、身をもって果しているのである。大規模な養鶏に、金融その他の支援措置を講ずることはもちろん結構である。しかし、主産地とか集団養鶏地帯といつても、その構成員の多くは零細経営であるのが現実である。それら零細経営者の犠牲に政治や行政がオンブしているのではたまらない。目立つものだけが養鶏ではない。底辺の方が大きい。そしてそれが常にグラグラしている。零細養鶏側も、犠牲ばかり払うことは反省しなければならない。

養鶏施策は、零細経営者にも及ぶものであることが必要であり、零細養鶏もその存在理由があることを更めて認識したい。現実に目をそむけることなかれ、といたかつたのである。